

〈書 評〉

リハビリテーションの思想

人間復権の医療を求めて

上田 敏(東京大学教授) [著]

明石 謙(川崎医科大学教授)

上田先生の「リハビリテーションの思想—人間復権の医療を求めて」を読む機会を得た。肩の凝(こ)らない、とても読みやすい本で、ほとんど休むこと無く一気に読んできました。そのとき思ったことは、「リハビリテーション科を一生やりたいと言う学生が相談に来たら、この本を一冊あげて、『読んだ後にもう一度相談にいらっしゃい』と言えば良いな」ということである。さて内容について述べてみたい。

序章は先生の personal history である。New York では、私も 1/2 年ほど、先生と同じ所で training を受け、先生が navigator、私は私のベコベコの ワーゲンで motor man の役をやって随分 New York 州を旅行して回った。貧しくはあったが楽しい思い出である。

第一章の「リハビリテーションの理念」では、障害者の全人間的復権を正面に掲げ、悠生園での体験、高等学校の物理の先生、結婚してあまり時間の経っていない若い女性などの具体例を挙げ解りやすく説明してある。この章はまた第二への伏線とも感じられる。

第二章は「リハビリテーション医学とはなにか」、つまりリハビリテーション医学の説明である。早期離床、廃用症候群の説明は筋道を建ててスマートに説明されてい

る。その後でリハビリテーション医学の三つの特徴、つまり目的、対象、方法をそれぞれ「復権の医学」「障害の医学」「教育的、代償的な色彩が強いこと」を挙げた。そしてそのおのおのに「治癒させ得ない場合もある」「横割の専門」「障害とともに前向きに生きることの学習」を挙げた。先生の「三つの……」はまだ続く。

予防医学としてのリハビリテーション医学では、三つの段階の予防について述べられており、たいへんわかりやすい。次にリハビリテーション医療の三つのタイプとして「予防的」「回復的」「維持的リハビリテーション」を挙げて説明している。この章の初めとよく似たことなのだが、初めを縦の見かたとすれば、後半は横の見かた(もしかすると初めが横で後が縦かもしれない)とも考えられ、よく頭に入るように計画されている。

第三章は障害と障害者、およびそれらに対するアプローチについて述べられている。まず障害者については、機能障害、能力障害、社会的不利についての説明がある。アプローチのところでは、社会的不利についての説明が印象に残る。いくつかの良い結果が得られた例が示されているが、いずれも先生のかかわりがあったからこそ望ましい状態に達したのであ

う。

第四章には「リハビリテーションを考える」の標題が付けられている。ここで取り上げられているいくつかのテーマはいずれも読んでいて気が付くとうなずいていたり手を叩(たた)きたくなったりする。できる ADL と、している ADL はいつも病棟と OT の間の discrepancy として問題となることであり、病棟へ帰るとすぐベッドに入って眠ってしまう患者も確かにいる。もっとも共鳴したのは「患者の時間は貴重」の項である。医師やセラピストの軽率な探究心から「チョットやってみる」無駄な治療行為がいかに多いことか。無論、都市型リハビリテーションには大賛成である。

終章の「治ることとよくなること」については、私たちが使っている言葉と社会で使われている言葉の微妙な意味の違いを再確認した。

さて、この稿を終えるに当たり私は、この本の特徴を三つ挙げたいと思う。まず解りやすく読みやすく、著者の考えがよく理解できること、次に中に述べられていることのおのおのにはきちんとした事実やデータの裏付けがあること、さらにリハビリテーション医学のところが述べられていることである。もう一つ付け加えるならば、第四章の事例がさらに積み上げられればこのすばらしい本の輝きをさらに増すことであろう。

おや、いつの間にか四つになってしまった。

(A 5 判, 152 ページ, 図 1, 定価 1400 円, 送料 300 円, 1987 年, 医学書院刊)